『源氏物語』夕顔巻の贈答歌における「光」と「花」
―生徒の「読み」を促すための教材分析―

高橋佑希

はじめに

文学教育としての「読み」の授業においては、生徒の多様な解釈が尊重される。教師は生徒が多様な解釈を創出できるように、あらかじめ教材分析を通じて必要な手立てを講じておく。大内善一は、教材分析は「≪何を≫教えるかという、その教材内容を取り出す[…]授業を具体的に構想する作業」であると述べ、「学習者側の〈読み〉の予想を行う作業」をその第一工程に据える[1]。

そこで本稿は、『源氏物語』夕顔巻の贈答歌を教材分析の対象に、生徒の「読み」を促すための手立てを講じることを目的とする。夕顔巻の贈答歌は学術的な異説が多いため、授業でも多様な解釈の創出が期待できる。本稿では、授業過程でグループ活動等を取り入れる場合も、結論としてグループの解釈を一つにまとめることを目指さない。むしろ一つの解釈に限定することの難しさを通じ、生徒が本来的に多様な解釈のあり方を理解することに教育的意義を求める。

そのためには、生徒が教師によって提示された出来合いの解釈をなぞるのではなく、生徒自身の「読み」によって固有の解釈を創出する手立てが必要となる。文学の授業についてR・スコールズは、「われわれのしごとは、学生たちにかわって『読み』を作りだすことではなくて、彼らが自分の読みを作りだすための道具を与えてやることにある[2]」と述べ、文学研究の理論を読むことの教育において実践している。

ただし、スコールズが対象とするのは大学生であるため、授業で用いる理論も本稿が対象として想定する高校生にはやや高度である。そこで本稿では、生徒が「自分の読みを作りだすための道具」をテマティズム[3]に限定し、さらに「光」と「花」をその分析対象に設定する。分析にあたっては、「光」と「花」に関する、いわゆる古典常識（以下、「古典常識」）と学術的知見を参照する。

一般的な文学研究では、既存の説に批判・検討を加えながら、結論として一つの説を主張するのが常である。しかし、本稿は諸説を参照しながらも、あえて一つの説には限定せず、可能な解釈群を設定することを目標とする。こうした教材分析の観点に立った研究は散見さ れる[4]ものの、いまだ十分な蓄積があるとはいえない。したがって、本稿のねらいは、教材分析を通じて文学研究の成果と学校の古典教育をつなぐことにある。

以上のことを達成するために、本稿は次の順序で論を進める。第一章では、「光」と「花」に関する「古典常識」と『源氏物語』の学術的知見を確認する。第二章では、夕顔巻のなかでも特に異説の多い二組の贈答歌の先行研究を整理し、それぞれの歌の可能な解釈群を設定する。その上で、生徒の「読み」を促すための教材分析のあり方を考察する。

なお、本稿では引用に際してルビは適宜省略する。また、『源氏物語』本文の引用はすべて阿部秋生ほか（校注）『源氏物語①』（小学館、（新編日本古典文学全集）、一九九四年）に拠る。注釈と現代語訳も特記のないかぎりこれに準ずる。

一　『源氏物語』における「光」と「花」

本章では、表象としての「光」と「花」について、生徒が「自分の読みを作りだすための道具」として参照するのに適した内容を整理する。そのために、本章の各節では次のように論を展開する。

まず「古典常識」としての「光」と「花」の捉え方を確認する。本稿では「古典常識」の意味を「古典を享受・批評する際に必要とされる汎用的な背景知識」と措定して おく[5]。次に『源氏物語』における両語の捉え方を確認する。

（一）　表象としての「光」

まず「光」に関する「古典常識」を確認する。『角川古語大辞典』（以下、『角川古語』）によれば、「光」は「①目に感じる光線。光沢。[…]」②転じて、容姿についていう。③いちだんと目立つ存在。誇りにすべき事柄。また、前途を照らす指針。光明。④国家・神仏の権威や徳。栄光。[…]⑤仏の後光。光背[6]」（小項目とその説明および用例省略。以下同じ）を意味する。これらの語釈からは、「光」の肯定的な正のイメージが読み取れる。

さらに吉見健夫によれば、「『光』は和歌表現史の中では『光輝・栄誉、愛情・慈愛、恩恵』など多様な意味性を与えられるが、『光』といえば光源氏がまず意味されるのはこの物語［稿者注――『源氏物語』のこと］のいわば 常識[7]」である。同様の指摘は他の論者にもみられるが、そこでたびたび取り上げられるのは夕顔巻の次の歌である。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

この歌は夕顔巻の冒頭部において、源氏が五条の檜垣に見つけた「夕顔」を「口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ」といって取りに行かせた折、「黄なる生絹の単袴長く着なしたる童」から手渡された「白き扇」に書かれていたものである。この歌について武原弘は、「『光』が、源氏の超越的美質を表現するための特定語であることは、前後の諸巻の叙述を通して、動かない[8]」と述べている。

富永直美は、武原のこの論述への批判として、『源氏物語』作中、夕顔巻以外で「光」を含む歌七首のうち、「光」が源氏を暗示するも

のは一例であり、その他は帝を暗示していると指摘する[9]。しかし、実際に「光」が何を暗示するかは論断しがたい。なぜなら、ある語が暗示するものを一概に定めることは、次の二点において「読み」の実情にそぐわない。

第一に、夕顔巻で源氏と中将の君が言い交わす贈答歌について、侍童が「花」の暗喩性を理解していないように（後述）、読み手もまたある表現の暗喩性を認められない場合があり得る。第二に、たとえ該当場面が内容的に源氏と無関係であっても、『源氏物語』を「読む」という行為において、自然発生的に「光」から源氏を連想することはあり得る。

「光」が主に正のイメージで捉えられる一方、『源氏物語』ではそれが負のイメージに転じることもあると指摘されている。河添房江は「光」という語のイメージを仏教的な歴史的背景に照らし合わせ、「光る君」の命名伝承の究明を試みている。河添は「王権譚にかかわる光の賛辞も、必ずしも持続し強化されるものではなく、むしろ明滅し消長するものであることに、その特徴があるだろう[10]」と述べ、「光」の両義的なイメージと物語の展開の関連性を論証している。

以上のことから、「光」は「古典常識」、和歌表現史において主に正のイメージで捉えられる一方、光源氏を主要人物とする『源氏物語』においては、負のイメージとして物語の陰影を形づくっていることが確認できた。それは明滅する「光」の両義的なイメージが、その名を冠する源氏に投影されているという見方である。夕顔巻の贈答歌における「光」を論じる際にも、その両義的なイメージに留意する必要がある。

（二）　表象としての「花」

次に「花」に関する「古典常識」を確認する。『角川古語』では、「花」の語釈を「①植物の器官の一。②形状や色彩から比喩的に用いる。③花にあやかったり、花を意匠した物や事柄。④花の美しく咲き誇るさまにたとえていう。⑤花の移ろいやすいさま、定めないさまにたとえていう。形容動詞としての用法も見られる[11]」と説明している。このうち、「①植物の器官の一」には小項目として「㋑特に、梅の花をいう［…］㋺特に、桜の花をいう」という語釈がある。植物一般の一器官を指す「花」という語が、ときに「梅の花」あるいは「桜の花」を特定するのは、「古典常識」の好例である。

また、「花」が「④花の美しく咲き誇るさまにたとえていう」といった正のイメージだけでなく、「⑤花の移ろいやすいさま、定めないさま」といった負のイメージをもつ点に注目したい。たとえば小野小町の歌「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに[12]」において、「花」は美しさを象徴すると同時に、やがて移ろいゆくことを含み込んでいる。このような「花」の両義性を理解しておくことが、贈答歌の解釈において重要である。

特に女性に花の名があてがわれることの多い『源氏物語』において、「花」のイメージは物語に大きな意味をもたらす。夕顔巻の代表的な名の花は「夕顔」である。『万葉集』には花冠を人の顔に見立てた「顔花」「顔が花」という表現があるが、そのような「顔花」を踏まえて成立したとされるのが「朝顔」という語である[13]。そして、その「朝顔」との類似から名づけられたであろう「夕顔」にも人の顔が連想される。

夕顔巻において、源氏が五条の檜垣に「夕顔」を見つける場面は「切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる」と描写される。その花の咲くさまが「笑みの眉ひらけたる」と表現されるように、「夕顔」は多分に擬人化されて観賞される花であった。

しかも、夕顔巻における「夕顔」のイメージは古注釈から「賤しい」という評でほぼ一貫している。『源氏物語提要』には「夕顔はいやしき垣ねに咲はなれは、やさしくもなき花にて、上臈の御手つけさせ給へからす[14]」とあり、『花鳥余情』には「ゆふかほの花はいやしきかきねにさく花なれは女もわか身にたとへていへり[15]」とある。

そのほか、夕顔巻には「朝顔」が登場する。「朝顔」の歌を交わすのは源氏と夕顔の女ではなく、源氏と中将の君である。中将の君は六条御息所の女房で、その歌は源氏が「霧のいと深き朝」に六条御息所のもとから帰る折、見送りのために供していた中将の君の手をとって詠みかけたものである。

咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝顔

この贈歌は中将の君に「公事」としてかわされてしまうが、歌に詠まれた「花」が「朝顔」を明示すると同時に、女性――ここでは中将の君――を暗示する点は定説となっている。掲歌の後に、その表意のみを汲み取った「をかしげなる侍童」が「花の中にまじりて朝顔折りてまゐる」ように、「花」の暗喩性を認められるか否かは物語内の聞き手、さらには物語の読み手の性質に依存する。中将の君は「花」の暗喩性がわかる人物として、侍童はそれがわからない人物として描き分けられているのである。

以上のことから、夕顔巻における「花」が「夕顔」あるいは「朝顔」を明示するとしても、それをただちに特定のイメージに紐づけることは妥当でない。表現の機微を解するためには、「古典常識」や『源氏物語』の学術的知見を念頭に置きながらも、そのイメージをはみ出し、超えるものの存在を認めるべきである。

ところで、片桐洋一は『歌枕歌ことば辞典　増訂版』の「花」の項目において、学校で教えられている「古典常識」の限界について指摘している。

「国語」の時間に古典を初めて習った頃、「花」といえば「桜」のことだと何となく教えられ自分も納得していた。しかし、その後、古典文学を専門に研究するようになると、そうではないことがすぐにわかった。教育現場での常識が学問世界の常識と異なることは多い[16]。

ややもすれば教師の言説がそのまま「常識」として生徒に受け取られる「教育現場」においては、そこでの知識を相対化する手立てが求められる。国語科教師は「教育」と「国語」の専門家として、「教育現場での常識」と「学問世界の常識」を架橋する必要がある。

しかし、限られた時間のなかで数十人の初学者に一定の理解を求めなくてはならない「教育現場」において、「学問世界」のように一つの問題を掘り下げる余裕がないのも事実である。その意味で「古典常識」と称して解釈の当たりを付けることは必ずしも非難されるべきではない。より建設的な方法は、「古典常識」の通用を認めつつ生徒の「読み」の水準を個々のテクストに合わせていくことである。

二　先行研究の論点整理と解釈群の設定

本章では、第一章で確認した「光」と「花」の捉え方を念頭に置きながら、源氏と夕顔の女による二組の贈答歌を中心に考察する。夕顔巻の和歌ついて、吉見健夫は次のように問題の所在をまとめている。

夕顔巻の和歌は、源氏と夕顔の出会いを導く冒頭部の贈答を中心として、これまで数多くの議論を生み出してきている。それらの和歌が単に表現上の解釈に多くの問題を含むのみならず、その解釈の仕方によっては夕顔の人物造型の本質にまで問題が及ぶからである。[17]

たしかに「素直で鷹揚で愛らしく華奢な様であり、思慮深いところやぱっと目を惹く華やかさには欠 ける」[18]などと評される夕顔の女の身上や急変する巻後半の展開を踏まえれば、彼女の歌がとかく人物造型とからめて取り沙汰されることにも説得力はある。しかし、こうした既存のイメージと距離をとるために、本稿は源氏と夕顔の女の贈答歌における、表象としての「光」と「花」に注目したい。

夕顔巻には源氏と夕顔の女が交わした贈答歌が四組ある。本稿では、夕顔の女による贈歌〈心あてに〉と源氏による返歌〈寄りてこそ〉を第一贈答歌、源氏による贈歌〈夕露に〉と夕顔の女による返歌〈光ありと〉を第四贈答歌とし、それぞれ第一節と第二節で論じる。

（一）　第一贈答歌の論点と解釈群

まず夕顔巻の冒頭歌〈心あてに〉を取り上げる。この歌の詠まれた状況については第一章で述べたが、ここでは、源氏が夕顔の女のこの歌を「白き扇」の渡された直後ではなく、大弐の乳母を見舞ったその帰りしなに読んだことを付言しておく。それが次の場面である（傍線とルビは稿者による。以下同じ）。

修法など、またまたはじむべきことなどおきてのたまはせて、出でたまふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさび書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白[1]露の光そへたる夕[2]顔の花[3]

この引用部のあとで源氏は、扇や筆つきの趣向を「いと思ひのほかにをかしうおぼえたまふ」とある。源氏にとって〈心あてに〉の歌は彼の興味を引くに十分であった。

この歌に関する先行研究の論点は次の三つに大別できる。

(1)「それ」は何の指示語か。

(2)「白露の光」は何の喩か。

(3)「夕顔の花」は何の喩か。

(1)については三つの説が挙げられる。すなわち、【光源氏説】、【頭中将説】、【「夕顔」（花そのもの）説】である。「それ」に来訪者の人当てを見取るのが【光源氏説】と【頭中将説】、あくまで実景の自然詠に徹するのが【「夕顔」説】である。いずれの説も「心あてに」を「当て推量に」などと解しつつ、この歌が推量の体をとるのは、実際に判断材料が足りないか、ほとんど確信していながらもあえて謙虚さを表すためと解釈する。

これら三つの説は解釈の観点が異なるため、それぞれが対立した状態にある。【光源氏説】は表現的解釈により、歌中の「光」の語が光源氏を連想させると同時に、それがそのまま名指しの機能をも果たすと考える。この解釈が現在の通説であり、新潮日本古典集成、

新編日本古典文学全集（以下、新全集）、新日本古典文学大系（以下、新大系）などはこの説をとっている。

それに対し、【頭中将説】はより広い文脈からこの歌を読み解こうとする。それは夕顔の女がみずから見知らぬ人物（源氏）に贈歌することを疑問視し、実際は彼女が、往来の人物をかつての夫である頭中将であると誤認して歌を詠みかけたと推論する立場である。本稿は贈答歌を中心とした物語の解釈を目的とするため、今回、より大きな物語上のコードを必要とする【頭中将説】は考慮しない。

【「夕顔」説】は和歌の類例に基づく解釈である。ただし、この説の中心的な論者である清水婦久子は、旧説をすべて「誤解」とした上で、「和歌のことばを一つ一つ解明しつつ、より正しい解釈を示」すという立場をとっている[19]。しかし、各説が立脚点を異にする以上、それぞれの違いは論の正誤ではなく、物語の表現が生み出す多様な解釈の様態であると考えられる。

⑴の錯綜した状態について、今井上が「夕顔の花かと存じますと答えるのと同時に、そういうあなた様は、そのお顔を拝見したところ光源氏様ではと、さりげなく切り返したと考えることが十分可能なのではないか[20]」と述べているように、「それ」が明示的に「夕顔」を指しつつ、暗示的に源氏あるいは頭中将を指すという解釈は対立するものではない。したがって、⑴は「夕顔」が「それ」の直接的な指示対象であるという認識を出発点とするのが穏当である。

⑵については諸説を分類することが困難である。その例は光源氏その人、（不特定の）貴人の光来、さらに『あやしき垣根』に咲く夕顔の花が（同色の）白露の光につつまれた美しい光景[21]」など、解釈の幅が広く定めがたい。〈心あてに〉の歌における「光」は、それ単体で何かを暗示するのではなく、一首全体の解釈に合わせて婉曲的に意味を付加すると考えるのが妥当である。したがって、ここでは「光」が「古典常識」的な正のイメージを表す【正のイメージ説】という、やや漠然とした点で留めおきたい。

⑶については【光源氏説】、【夕顔の女説】、【「夕顔」（花そのもの）説】が挙げられる。⑶における【「夕顔」説】は、⑴の【「夕顔」説】と対応している。つまり、「それ」の指すものが「夕顔」であるならば、この歌はなによりもまず「花の名」を問うた来訪者に対する挨拶歌として考えるべきという主張である[22]。この説は和歌の通例を重んじ、特に〈心あてに〉の歌に構造が近似する『古今和歌集』の二七七番歌、凡河内躬恒による「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花[23]」との照応によって論証されている。

ただし、⑶における【光源氏説】・【夕顔の女説】の両説と【「夕顔」説】とでは、その観点が異なっている。すなわち、前者は「夕顔」の暗喩性に論及しているのに対し、後者は暗喩性の検討に消極的である。先ほど⑴については暫定的に「夕顔」が「それ」の指示対象であると述べたが、やはり〈心あてに〉の歌が挨拶歌の性格をもつことは否定しがたいと考える。「花」が何の喩であるか（ないか）については、二次的な問題として扱いたい。

したがって、〈心あてに〉の歌については、表意において「それ」が「夕顔」を指す挨拶歌であると捉え⑴、その上で「白露の光」と「夕顔の花」の暗喩性を検討する⑵、⑶という手順で読み解くのが適当である。「それ」が暗示するものは⑵・⑶と対応するため、⑴だけを独立して論じることはふさわしくない。翻っていえば、〈心あてに〉の歌については⑵と⑶を優先的に論じることが一首全体の

解釈につながるのである。

そこで、特に(3)の各説を対比的に訳し分けると次のような解釈群を設定することができる。

イ：あなた様を白露の光が添えられた夕顔の花のようにお美しい光源氏様かとお見受けします。

ロ：わたくしどもは夕顔の花に白露の光が添えられたように僥倖に恵まれたのでございましょう。

ハ：あなた様のご光来によって賤しい夕顔の花も見紛う美しさを賜りました。

これらは可能な解釈を文章化したものであり、逐語的な現代語訳とはなっていない。(3)を起点に解釈することで、(1)・(2)の諸説ともその対応関係が決定した。このように先行研究の論点を基に解釈群を設けることで、可能な解釈をおおよそ定めることができ、その歌と物語との関連性が明らかになる。また、解釈群の設定は生徒の解釈を想定するとともに、生徒が解釈につまずく箇所を見極めることにつながる。

次に〈心あてに〉の歌に対する源氏の返歌を取り上げる。

寄りてこそそれかとも 見めたそかれにほのぼの見つる 花の[4] 夕顔[5]

この歌は〈心あてに〉の歌に興味をもった源氏が、惟光を通じてその歌の主が「揚名介なる人の家」の者であることを調べた上で詠んだものである。この歌はまた、筆跡から送り主を勘づかれないように「いたうあらぬさまに書きかへたまひて」随身に遣わしているが、こうした配慮は源氏が夕顔の女の邸に「いとことさらめきて、御装束をもやつれたる狩の御衣を奉り、さまを変へ、顔をもほの見せたまはず」通うことからも窺える。

この歌に関する先行研究の論点は次の二つに大別できる。

(4)「見め」の主体は誰か。

(5)「花の夕顔」は何の喩か。

(4)については【光源氏説】と【夕顔の女説】が挙げられる。〈心あてに〉の歌における「見る」の主体が夕顔の女であるのに対し、〈寄りてこそ〉の歌における「見め」の主体は源氏か夕顔の女の両者で意見が分かれている。

この歌における「見め」は、動詞「見る」の未然形と助動詞「む」の已然形に品詞分解される。ここでの「む」の意味は意志もしくは勧誘である。意志の場合は「わたしが見る」のに対し、勧誘の場合は「あなたが見る」ことになる。すなわち、前者であれば主体は源氏（【光源氏説】）であり、後者であれば夕顔の女（【夕顔の女説】）であると判断できる。

(5)については【光源氏説】と【夕顔の女説】が挙げられる。「夕顔の花」をめぐる〈心あてに〉の歌の論点(3)では、これら両説に加えて【「夕顔」（花そのもの）説】があったが、〈寄りてこそ〉の歌の場合、源氏は随身に手折らせた「夕顔」を所持している。そのことを踏まえれば、〈寄りてこそ〉の歌における「花の夕顔」は「夕顔」そのものではない何かを暗示していることになる。それは文脈上、源氏（【光源氏説】）か夕顔の女（【夕顔の女説】）である。

そしてまた、(4)の【光源氏説】は(5)の【夕顔の女説】と、(4)の【夕顔の女説】は【光源氏説】と対応している。「見め」の主体とその対象である「花の夕顔」が同一では、自分の姿を確かめる（「見る」）ことになってしまい、贈答歌として不適当である。したがって、〈寄

りてこそ〉の歌の可能な解釈群は次のようになる。

ニ：近寄ってご覧になりませんか。あなたがたそがれ時にぼんやり見たというわたしの顔を。

ホ：近寄って見るとしよう。きっとわたしがたそがれ時にぼんやり見た夕顔の花のようなあなたの顔を。

この解釈群では、「それ」を「わたし（源氏）の顔」（解釈ニ）、「あなた（夕顔の女）の顔」（解釈ホ）と解している。〈寄りてこそ〉の歌の「それ」は〈心あてに〉の歌同様、第一に「夕顔」を指す。しかも、〈心あてに〉の歌と〈寄りてこそ〉の歌における「それ」は同一の個体と考えるのが語法上妥当である。しかし、贈答歌は必ずしも論理的な正しさに拘束されない。むしろ意識的に相手の意図とずれた返歌をすることは常套手段である。

たとえば〈心あてに〉の歌については「源氏君を、夕皃の花にたとへて、今夕露に色も光もそひて、いとめでたく見ゆる夕皃の花は、なみ〳〵の人とは見えず[24]」と解していた本居宣長も、〈寄りてこそ〉の歌については「もしは此歌にては、かの簾のすきかげに見えし女どもをさして、夕皃の花にたとへたるにもあらむか[25]」と留保している。つまり、〈心あてに〉の歌における「夕皃の花」は源氏を、〈寄りてこそ〉の歌における「夕皃の花」は「女ども」を暗示しているという主張である。

このように、第一贈答歌において「花」（「夕顔」）の暗示するものがそれぞれ異なる可能性は十分ある。したがって、一見矛盾するような贈答歌の解釈――たとえば〈心あてに〉の歌の解釈イと〈寄りてこそ〉の歌の解釈ホ――を採用することも可能なのである。

（二）第四贈答歌の論点と解釈群

本節では第四贈答歌の論点を取り上げる。第四贈答歌については、特に夕顔の女の最後の歌〈光ありと〉をめぐってさまざまな議論が交わされている。この歌は「なにがしの院」で一夜を共にした源氏と夕顔の女が、「日たくるほどに起きたまひて」言葉を交わすなか、夕顔の女が源氏による〈夕露に〉の歌への返歌として詠んだものである。ここでは依然として正体を明かさない源氏に対して夕顔の女が不安を抱く場面から引用する。

顔はなほ隠したまへれど、女のいとつらしと思へれば、げにかばかりにて隔てあらむも事のさまに違ひたりと思して、

「夕[6]露に紐とく[7]花は玉ぼこのたよりに見えしえにこそありけれ

露[8]の光やいかに[9]」とのたまへば、後目に見おこせて、

光[10]ありと見し夕顔の上露[11]はたそかれ時のそらめなりけり

とほのかに言ふ。をかしと思しなす。げに、うちとけたまへるさま世になく、所がらまいてゆゆしきまで見えたまふ。

源氏の贈歌における「夕露」と「花」、さらに「露の光やいかに」という問いかけは夕顔の女の最初の歌〈心あてに〉を喚起し、夕顔の女もそれを踏まえた返歌を詠んでいる。ここで注目すべきは、夕顔の女による〈光ありと〉の歌が、源氏による贈歌および問いかけと、自身の〈心あてに〉の歌、二つの文脈を詠み込んでいるという点である。このことについては本節の終わりで述べる。

さて、源氏の〈夕露に〉の歌に関する先行研究の論点は次の二つ

に大別できる。

⑹「夕露」は何の喩か。

⑺「花」は何の喩か。

ここでは夕顔の女の返歌〈光ありと〉の分析を見据えて論点を二つに分けたが、⑹と⑺は同種の問題として扱うのが適当である。この歌の争点は、「夕露に紐と」いたのは源氏（【光源氏説】）と夕顔の女（【夕顔の女説】）のどちらか、という点に収斂される。[26]

【光源氏説】では⑺を源氏とする一方、⑹については積極的な暗喩性を与えずに「夕べの露」などと訳す。この説の要点は、源氏が夕顔の女に顔を見せて正体を明かす、まさにその行為を詠んだと捉えるところにある。この説では「紐とく」を、源氏が覆面を取った（覆面の紐を解いた）ことの喩とする解釈があるが、本文に覆面に関する記述がないため、十分な論拠を得ていない。したがって、ここでは源氏が何によって顔を隠していたかについては問わず、正体を明かしたという点に解釈の重きを置きたい。

【夕顔の女説】では、⑹を源氏、⑺を夕顔の女であるとし、夕顔の女が源氏に心を開いた（「紐と」いた）ことに歌の眼目があると捉える。また、この説では「紐とく」を「下紐を解いて契りを交わす」（新全集）ことなどと解する。したがって、源氏がこの贈歌の前後で正体を明かすという文脈は後景化し、その後も明確に語られることはない。

要するに【光源氏説】では、源氏が二人の間の「隔て」を疎んじていた贈歌直前の叙述を踏まえ、源氏が自らの正体を明かすことに歌との対応を見取る。それに対して【夕顔の女説】では、あくまで夕顔の女に話題が向いている。両者の違いを踏まえれば、この歌の解釈群は次のようになる。

へ：二人に縁があったからこそわたしは夕べの露に乗じて正体を明かすのです。

ト：二人に縁があったからこそあなたはわたしに心を開いてくれたのでしょう。

これらの解釈は、この歌に続く「露の光やいかに」という問いかけと密接な関係にある。この歌における「夕露」の解釈が、問いかけの「露」と呼応すると考えられるからである。

源氏による問いかけに関する先行研究の論点は次の一点である。

⑻「露の光」は何の喩か。

⑻については【光源氏説】、【光源氏の容貌説】、【光源氏の愛情説】が挙げられる。【光源氏説】は「露の光」が夕顔の女の〈心あてに〉の歌における「白露の光」を喚起し、当時の「心あて」の当否を尋ねたものとみる。したがって、「露の光」は直接的に何かの喩としてではなく、婉曲的に〈心あてに〉の歌を喚起するものとして機能している。

【容貌説】と【愛情説】は「露の光」が源氏を暗示しているという認識を出発点としながらも、「いかに」の部分の解釈で相違がみられる。【容貌説】では「いかに」を「いかに見ゆるか」などと解し、源氏が〈夕露に〉の歌の前後で正体を明かした上で、自身の顔についての感想を尋ねたとする。それに対して【愛情説】では「いかに」を「いかに添へたるか」[27]と解し、源氏が夕顔の女に思いを寄せることで、夕顔の女にどのような身の上・心情の変化があったかを尋ねたとする。

上記三つの説を訳し分けると次のような解釈群を得られる。

チ：わたしはあなたが推察した通りの人物ですか。
リ：わたしの顔はあなたから見ていかがですか。
ヌ：わたしの愛情はあなたをどう変えますか。

文脈上の整合性を考慮すれば、〈夕露に〉の歌の解釈へは問いかけの解釈チ・解釈リに、〈夕露に〉の歌の解釈トは問いかけの解釈ヌに対応する。源氏が正体を明かしたことを前提としなくては、推察の当否や顔についての感想を問うことはできないからである。

次に夕顔の女の返歌〈光ありと〉を取り上げる。この歌の論点は次の三つに大別できる。

⑼「光」は何の喩か。
⑽「夕顔の上露」は何の喩か。
⑾「そらめ」の真意は何か。

二つの文脈を詠み込んでいるという複雑な状況から、この歌の解釈は錯綜しがちである。各論点の対応関係を明確にするため、ここでは⑾、⑽、⑼の順に述べていく。また、各論と解釈の対応については表一の参照を願いたい。

表一　〈光ありと〉の歌における各論と解釈の対応

解釈	⑼「光」	⑽「夕顔の上露」	⑾「そらめ」	
ルa	光源氏		陳謝	冗談
ルb			冗談	
ヲa	美しさ	光源氏の容貌	陳謝	冗談
ヲb			冗談	
ワa	愛情	夕顔の女のもとへの光源氏の来訪	陳謝	冗談
ワb				

さて、⑾については【陳謝説】と【冗談説】が挙げられる。夕顔の女はこの返歌において、「白き扇」を贈ったときに「光ありと見し」ことは「そらめ」（空目）であると答えた。この歌における「そらめ」は「見間違い」という意味であるが、ここではその「真意」が争点となっている。これを文字通り「見間違い」であるとすれば陳謝（【陳謝説】）、二人の「げに、うちとけたまへるさま」を考慮すれば冗談（【冗談説】）として捉えられる。

⑽については【光源氏の容貌説】と【光源氏の来訪説】が挙げられる。両者の大きな違いは、この歌における「夕顔」を夕顔の女の喩と考えるか否かである。【容貌説】の場合、「夕顔」は源氏の「夕方の顔」と捉える。それに対して【来訪説】の場合、「上露」が源氏を指し、「夕顔」は夕顔の女を指すと捉える。

⑼については【光源氏説】と【正のイメージ説】が挙げられる。⑼は基本的に〈心あてに〉の歌における論点⑵（「白露の光」の喩）と対応するが、⑵がやや曖昧なイメージで処理されていたのに対し、こちらは「光」が話題の中心となっているため、積極的に暗喩性を見て取ろうとする傾向がある。両説の考え方は次のようにまとめられる。

まず【光源氏説】は、夕顔の女がこの期に及んでなお正体を明かさない男（源氏）に対し、かつて自身が「心あてに」男を源氏と推察してしまったことを陳謝したとみる。男が正体を隠すのは例の推察が外れているため（実際は当たっている）という夕顔の女の思い違いである。この説をとる解釈では、「夕顔の上露」はやや後退して

捉えることになる。源氏の容貌は結局、源氏のことを指しているからである。古注釈ではこの説が優勢であり、『河海抄』の「露の光やいかにととはれたるにあなかちにつゝむけしきなるを女のかたよりさし過ていひしりけると思てその人かとみしはそらめにてありけりとおほめきたる心也」[28]という解釈が『源氏物語提要』や『孟津抄』に引き継がれている。

他方、【正のイメージ説】は、それ自体では曖昧なため、論点⑽の各説との対応によって解釈が決まる。【容貌説】の場合、「光」は源氏の形容として美しさなどと解する。源氏が「露の光やいかに」といって自信ありげに夕顔の女に感想を求めたのに対し、夕顔の女が戯れにあべこべを答えたとみるのである。現代注釈の大半はこの説をとり、「光があると見てとった夕べのお顔の上にかかる露(美しさ)は、暮れ方のぼんやりした時刻の見損ないであったことです。『光』は光源氏の喩でもある」[29](新大系)、「わざと本心とは逆のことを言って戯れる媚態」(新全集)などと記している。

【来訪説】の場合、「光」は夕顔の女に「そへたる」(〈心あてに〉の歌)ため、源氏から夕顔の女への愛情と解する。ただし、夕顔の女はその愛情を(「真意」はさておき)「そらめ」として否定している。清水はこうしたやりとりについて、「つまりこの二首は、男が求愛する歌に対して、女が切り返しの歌でその愛情を疑ってみせるという正統の〈贈答歌〉になっているのである」[30]と述べている。

以上のことを踏まえ、「光ありと見し夕顔の上露」の句は、「論点⑼のｘ説＋論点⑽のｙ説」という解釈の形をとる。その結果得られる解釈群は次の通りである。

ルａ：あなた様を夕顔の花の露のような光源氏様かとお見受けしましたが、それは見間違いでございました。

ルｂ：あなた様を夕顔の花の露のような光源氏様かとお見受けしましたが、それは見間違いだったかしら。

ヲａ：あなた様のお顔を夕顔の花の露のようにお美しいとお見受けしましたが、それは見間違いでございました。

ヲｂ：あなた様のお顔を夕顔の花の露のようにお美しいとお見受けしましたが、それは見間違いだったかしら。

ワａ：わたくしどもは夕顔の花に露が添えられたように愛情を賜ったと存じましたが、それは勘違いでございました。

ワｂ：わたくしどもは夕顔の花に露が添えられたように愛情を賜ったと存じましたが、それは勘違いだったかしら。

通説的な夕顔の女の人物造型に照らせば、解釈ヲａと解釈ワｂは受け入れられないであろう。解釈ヲａは無礼な、解釈ワｂは傲慢な性格と捉えられるからである。しかし、人物造型に拘泥する読み方はしばしば議論の膠着を招いてきた。ある解釈がむやみに夕顔の女を貶めるものであってはならないが、もし新たな「読み」を生みだすための挑戦であるならば、それも認められるべきである。

このように、〈光ありと〉の歌における「光」と「そらめ」は密接に結びついており、特に「光」の解釈はこの歌のみならず、前後のやりとり、夕顔の女の人物造型にも波及する。しかし、難解な叙述や夕顔の女の性格に拘泥するあまり、いくつかの説には埋めがたい溝があることも事実である。そこで武原弘は、従来の説に基づく読み方の疑問点を挙げつつ[31]、それら疑問点の「一見矛盾とも不合理とも見なされる細部」を止揚する「歌物語的方法」による読解法を提案している。

第一贈答歌と第四贈答歌（源氏と夕顔の贈答歌）の対応関係は動かない。が、その間に散文で描写される二人の愛の進展状況と贈答歌とは、正確に整合しないままの物語表現として完結せしめられているのではなかろうか。[32]

源氏の贈歌と「露の光やいかに」という問いかけは、夕顔の女の〈心あてに〉の歌を喚起するメタメッセージとしも機能している。そこで問題となるのは、その整合性の度合いである。第一に贈歌に対する当座の対応、すなわち返歌が求められ、第二に夕顔の女自身の〈心あてに〉の歌との対応が求められる。しかし、この二方向への対応を厳密な整合性のもとで両立させようとすると、展開上の矛盾や齟齬が生じかねない。

武原はそうした矛盾や齟齬を、物語の欠陥や誤解に基づく解釈の結果ではなく、多様な解釈を生みだす余地として捉えている。つまりそれは、弁証法的な意味の創造をもたらすテクストの「空所」である。歌と物語（散文）の融合した『源氏物語』が本来的に「空所」をもつテクストであるならば、その解釈は必ずしも整合性に拘束されるべきではない。生徒が『源氏物語』を読む際にも、テクストから逸脱しないよう配慮しつつ、多様な解釈を保証するための観点が必要となるのである。

結び

第一章では、「古典常識」と『源氏物語』における「光」と「花」の捉え方を確認した。両語の「古典常識」的な理解は『源氏物語』における理解と対立するものではないが、物語の展開を多彩に捉えるためには、正負の両義的なイメージをおさえる必要があった。第二章では、二組の贈答歌に対する先行研究の論点を整理し、可能な解釈群を設定した。それら解釈群は学術的な異説を基にしているため、さまざまな「読み」の水準の解釈を内包している。

可能な解釈群の設定は、次の二点に教育的意義を求められる。第一は、生徒の解釈を想定することにつながる点である。第二は、その解釈がどのような点に注目して創出されたのかを検証できる点である。生徒の多様な解釈を保証することは、積極的な「読み」を促すことにつながる。そうした「読み」の探究によって、生徒は古典を読む楽しさを見出せるのである。

文学教育としての「読み」の授業を講じる際の問題点は、それが文学研究に寄りすぎて教育的機能を損ねてしまうこと、あるいは逆に、教育的価値を優先するあまり文学的探究が疎かになることにある。松本修は、国語科教育に関する研究と実践が乖離している近年の状況を踏まえ、「学術的・学問的な専門知をいかに教室の現実に結び付けるかという実際的なプロセスにおいて、専門知と実践知との関係の在り方が示されるべきなのである」[33]と提言している。

本稿では「専門知」としての『源氏物語』に関する学術的知見を、生徒が「自分の読みを作りだすための道具」として用いることができるよう整理・精査した。また、その過程で、専門知と実践知の融合といえる「古典常識」についても言及した。しかし、実践知は単に専門知を手軽にした知識であってはならない。授業の組み立て方や発問の仕方、生徒の発言の汲み取り方といった、授業に関する総合的な技能が実践的な知を支えるのである。本稿は専門知としての学術的知見を中心的な論題としたため、実践面の検討については今後の課題としたい。

注

（1）　大内善一『国語科授業改革への実践的提言』（溪水社、二〇一二年）一九－二一頁。

（2）　ロバート・スコールズ／折島正司（訳）『テクストの読み方と教え方　ヘミングウェイ・ＳＦ・現代思想』（岩波書店、（岩波モダンクラシックス）、一九九九年）四一頁。

（3）　テマティズム（テーマ批評）とは、繰り返し使用される語の分析によって、その語のイメージがテクストにもたらす効果を明らかにする分析手法である。テマティズムはまた、テクスト本位の分析手法であるため、作者の表現意図を明らかにするものではない。

（4）　たとえば難波博孝は、言語学の理論を援用しながら、テクストの多様な解釈を生みだす箇所（「多様性の発現点」）を特定し、可能な解釈群を設定している（難波博孝「多様な解釈を保証する教材分析――詩「りんご」の場合――」『国語科教育』第四一集（全国大学国語教育学会、一九九四年三月））。

（5）　ただし、漢文に関する知識は「古典常識」に含まないのが通例である。なお、二〇一五年度用「古典Ｂ」の教科書十社十八種類のうち、筑摩書房『古典Ｂ　古文編』のみが「付録」に「古典常識」という見出しで「装束・調度」「暦法」の図版と説明を掲載している。その他の教科書にも同様の資料はあるが、いずれも「古典常識」（あるいは「古文常識」）という呼称は使用していない。

（6）　「ひかり」中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）『角川古語大辞典　第五巻』（角川書店、一九九九年）一三頁。

（7）　吉見健夫「夕顔巻の和歌と方法」『国文学解釈と鑑賞　別冊　源氏物語の鑑賞と基礎知識　⑧夕顔』（至文堂、二〇〇〇年一月）二三四頁。

（8）　武原弘「「夕顔」巻の文章表現――「心あてに…」の歌の解釈をめぐって――」『日本文学研究』第二八号（梅光女学院大学日本文学会、一九九二年十一月）五六頁。

（9）　富永直美「『源氏物語』夕顔巻冒頭について――頭中将誤認説の可能性――」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』Vol.平成二十一年度　海外教育派遣事業編（お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局、二〇一〇年三月）三五四頁。

（10）　河添房江「源氏物語の比喩と象徴――「光」「光る君」「光る源氏」再考――」増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成　第四巻　源氏物語の表現と文体　下』（風間書房、一九九九年）一六七頁。

（11）　「はな」中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）『角川古語大辞典第四巻』（角川書店、一九九四年）一一〇八－一一〇九頁。

（12）　小沢正夫・松田成穂（校注）『古今和歌集』（小学館、（新編日本古典文学全集）、一九九四年）六八－六九頁。

（13）　吉野政治「朝顔・昼顔・夕顔・夜顔――体系化を目指した花の名――」『同志社女子大学日本語日本文学』第二二号（同志社女子大学日本語日本文学会、二〇一〇年六月）二頁。

（14）　稲賀敬二（編）『今川範政　源氏物語提要』（桜楓社、（源氏物語古注集成）、一九七八年）二九頁。

（15）　中野幸一（編）『花鳥余情　源氏和秘抄　源氏物語之内不審条々　源語秘訣　口伝抄』（武蔵野書院、（源氏物語古註釈叢刊）、一九七八年初版、二〇〇六年再版）三九頁。

（16）　片桐洋一『歌枕歌ことば辞典　増訂版』（笠間書院、一九九九年）三

四二頁。

（17）吉見健夫「夕顔巻の和歌と方法」（前掲論文）二三二頁。

（18）土方洋一「夕顔の女と物語の生成」『国文学解釈と鑑賞　別冊　人物造形からみた『源氏物語』』（至文堂、一九九八年五月）八八頁。

（19）清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』（和泉書院、（研究叢書）、一九九七年）三八六頁。

（20）今井上「白露の光そへたる――夕顔巻の和歌の言葉へ」『文学』第七巻第五号（岩波書店、二〇〇六年九月）九〇頁。

（21）清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』（前掲書）三九七頁。

（22）注（21）に同じ。

（23）小沢正夫・松田成穂（校注）『古今和歌集』（前掲書）一二六頁。

（24）大野晋（編）『本居宣長全集第四巻』（筑摩書房、一九六九年）三七四頁。

（25）大野晋（編）『本居宣長全集第四巻』（前掲書）三七四－三七五頁。

（26）なお、「道」の序詞である「玉ぼこ」はそれ自体で「道」を意味し、「えにこそありけれ」の「え」は「枝」と「縁」の掛詞であると捉える点は両説でおおむね一致している。

（27）清水婦久子「夕顔の歌の解釈」『国文学解釈と鑑賞　別冊　源氏物語の鑑賞と基礎知識　⑧夕顔』（前掲書）二二九頁。ただし、引用に際して表記を一部漢字に改めた。

（28）玉上琢彌（編）『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年）二四六頁。

（29）柳井滋ほか（校注）『源氏物語　一』（岩波書店、（新日本古典文学大系）、一九九三年）一二〇頁。

（30）清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』（前掲書）四二九頁。

（31）武原弘は、四つの疑問点を挙げている。第一に、〈心あてに〉の歌を読んでいないはずの随身にその内容を既知とする様子が窺える点。第二に、〈心あてに〉の歌の作者について、源氏ははじめ「その宮仕人」と判断していたが、〈夕露に〉の歌および「露の光やいかに」という詠みかけではその作者を夕顔の女と特定している点。第三に、夕顔の女の従順で内気な人柄と往来の人物に贈歌する積極性の不整合を源氏が不審に思わない点。第四に、〈心あてに〉の歌とそれを踏まえた〈光ありと〉の歌が文脈上遠く隔たっている点（武原弘「『夕顔』巻の文章表現―「心あてに…」の歌の解釈をめぐって―」（前掲論文）五八－五九頁）。

（32）武原弘「『夕顔』巻の文章表現―「心あてに…」の歌の解釈をめぐって―」（前掲論文）六一頁。

（33）松本修「国語科教師の教材研究における専門知と実践知――芭蕉の二つの発句をめぐって――」全国大学国語教育学会（編）『国語科教師教育の課題』（明治図書出版、（国語教育学の建設）、一九九七年）一三八頁。

（たかはし・ゆうき／横浜国立大学大学院修士課程）